

## 「海に生きる人々」試論

— 成立事情の背景をめぐって —

### (一)

日本のプロレタリア文学運動初期の記念碑的作品として高い評価を得ている「海に生きる人々」(大15・10 改造社)は、葉山嘉樹の自筆「年譜」(『日本文学大全集—葉山嘉樹全集』昭8・2 改造社)によると、大正六年頃から十二年頃にかけての約六年間に書かれたことになる。

しかし、文学史的に高く評価されながら、この作品は多くの未解明な部分をもっており、作品成立の経緯についても浦西和彦の最近の研究<sup>1)</sup>によって、やっと解明されつつあるというのが現状であり、「海に生きる人々」完成の正確な時期は未詳である。

さて、浦西が「『海に生きる人々』は、嘉樹の名古屋における労働運動の体験を抜きに、その成立が考えられない作品である。」(浦西和彦「葉山嘉樹年譜」『葉山嘉樹』昭48・6 桜楓社 以下浦西「年譜」)と言っているように、藤原の回想の部分(十一章—十三章)は後から挿入することが可能であるにしても、作品全体にちりばめられた葉山の社会認識や歴史認識は、明らかに、名古屋における労働運動の体験なしには不可能なものである。

葉山の名古屋における運動歴は、名古屋セメント会社での組合組織の試みをも含めるとすれば大正十年五月以後に始まるということにな

\* 浅田 隆

ろうが、愛知時計電機争議裁判「第二回調査」(浦西「年譜」)に見る限り、この頃の葉山には「海に生きる人々」に横溢するような明確な階級意識はなかったと思われる。さらに名古屋新聞社入社と同時に名古屋労働者協会(以下協会)に加入するのは大正十年六月のことだが、この協会は、その綱領に「国家産業の発展を期す」「真の労資協調を期す」(浦西「年譜」)と謳っていることから明らかなように、「海に生きる人々」の階級意識からはほど遠いと言わねばならない。また、入社後間もなく執筆した記事「労働者としての立場」(『名古屋新聞』大10・6・26 清水茂「名古屋の労働運動と葉山嘉樹(その一)」『社会科学討究』昭39・12)にしても宗教的な語彙や発想によって労働者の解放を理論化しようとする傾向が強く、さらには「革命」ということばに対する葉山の認識にも曖昧さが感じられる。<sup>2)</sup>このような点から見ても、「海に生きる人々」の世界にあるかなり明確な社会認識や階級意識と、この頃の葉山との間には相当の隔りがあると言わねばなるまい。したがって、自筆「年譜」で葉山が言うように、この頃既に「海に生きる人々」に着手していたとしても、「海に生きる人々」が今日の姿をとるためには大正十二年の名古屋刑務所における執筆に際して、かなり大巾な改稿がなされねばならなかったはずであり、ディテールに共通性があったかも知れないにしても、テーマやモチーフに

\* 国文学研究室(1974年9月30日受理)

おいては二つの「海に生くる人々」は似て非なるものであったに違いない。葉山自身も「まるっきりそれまで書いたものとは、別な形式、別な感興の下に書いたのだった」(「代表作について」『九州文化』大10・8 浦西「年譜」)と言っているのである。

## (一)

「海に生くる人々」が葉山の代表作であるということもあって、この作品の人物について触れた研究はかなり多く、葉山のポジティブな側面とのかかわりの中に人物像が位置づけられる傾向が強いようである。しかし、特に小倉の形象を考えるとき、「情熱」「燃焼」「爆発」といったイメージとは逆な、むしろネガティブな葉山の側面とのかかわりの中に造型のモチーフを持っているように思われてならないのである。筆者の疑問を端的に言えば、「海に生くる人々」を論ずる際によく引用される藤原の「生活とは、燃えるものだ」と僕は思つたんだ。焼く、燃やさずやうな爆発するやうなものが生活だと僕は考へたんだ。」

「『俺達自身が何であるかを、俺たち自身で研究することが、何故悪いんだ』と、若い労働者たちは、警察の刺戟の洗禮を受けると、一種の無産階級信念——を抱くやうになって来たんだ。」(二三)という回想の上に「海に生くる人々」執筆時の葉山像を描き、激しく燃焼し前進しようとする葉山像の延長上に「海に生くる人々」をとらえようとしすぎてはいないだろうか。また、名古屋における労働運動草分け期の闘士であり指導者の一員でもあった葉山が、その運動の高揚の頂点において検束され、未決に収監された状況でこれを書いたということから、「海に生くる人々」を官権の弾圧やブルジョアの横暴への怒りの爆発としてストレートに位置づけてはいないだろうか。確かに作品中には怒りのことばが肉声によって叫ばれているのであって、葉山の内面にたぎる階級的情熱が至るところで噴出していることは否定し得な

い。しかし、葉山には「淫売婦」を書いた時の思ひ出(『文章倶楽部』昭3・7)という回想があり、次のような記述が見えるのである。

(淫売婦を七月十日に書きあげて)筆者)それから暫く経つて九月一日、例の大地震の時は、同じ監房で「海に生くる人々」を書いていた。

## (中略)

蚊と、蚤と、暑熱と、それから面接差入禁止だったから、老母と女房と、二人の幼児とが、どうして飯を食つてゐるか、病氣にでも罹つてゐほしくないか、運動の方はどうなつたか、などが、熱した頭の中でゴチャゴチャに、階級的情熱とコングラかつてゐた。

何しろ、昨日まで猛烈に飛び廻つてゐた奴が、今日つからは三疊程の廣さの板敷きの室に閉ぢ込められつ切りと云ふんだから、(中略)體は泰然と寝てゐたが、頭は監獄の塀外へ出て、過去、未來を自由奔放に駆け巡るのだつた。

## (中略)

その時分、私は文壇へ出ようの何のつて、望みもしなければ考へもしなかつた。然し、何しろ、何か書いてでもゐないと、考へが滅茶苦茶にどこへでも走りまはるので、そいつを一つ處へ繋ぎ止めるためには、どうしても思索の跡を辿る事の出来るやうに、書く以外に法がなかつた。

あれを書くと同時に、資本論の抜き書きもやつてゐた。(中略)又、私は、暑熱や、蚊や蚤のための睡眠不足から憂鬱になり、センチメンタルになつて、短歌見たいなものも作つて見た。

この四年、毎年一度監獄に囚はるる身の妻子思ひぬ。

面會の待合室に我兒泣くを、聞きて、  
「泣くな」と、叫びし我よ。

わが母は家で誰かが笑ふ時、  
「息子にすまぬ」と、言ひて止めしと。

これは「淫売婦」(『文芸戦線』大15・1)を書いた頃についての回想の一部分ではあるが、この文章からうかがい得る獄中の葉山の内面世界を、大正十二年六月二十七日から同年十月五日までの獄中生活の記録である「獄中記」(『葉山嘉樹日記』昭46・2 筑摩書房)の記述に重ねてみると、右の回想からうかがい得る葉山の内面世界が、「海に生きる人々」を獄中で完成させつつあった頃の葉山の内面世界に連続していることは否定し得ないだろう。そしてまた、このように家族の安否やその後の運動の動向といったものが「ゴチャゴチャに、階級的情熱とコングラかつて」いたと言ひ、過去とか未来とか、考えが滅茶苦茶に走りまわるために考えを「一つ處へ繋ぎとめ」「思索の跡を辿る」ために書いていたと回想していることなどから、「海に生きる人々」が敵階級への怒りや叫び・仲間に対する自覚の呼びかけや訴えの形をとりながら、一方では、葉山自身の内面への効用を持っていたのではないかという疑問が生じるのである。

わが母は家で誰かが笑ふ時、  
「息子にすまぬ」と、言ひて止めしと。

「『淫売婦』を書いた時の思ひ出」には右のような「短歌見たいなもの」が記されていた。葉山嘉樹と同郷の鶴田知也の談話「葉山嘉樹のこと」(『プロレタリア文学研究』昭41・10 芳賀書店)によると「大正八年頃には啄木を愛唱したり、啄木ばりの歌を作ったりして」もいたらしいが、葉山はこの歌の中に獄中の自己の複雑な心境を詠みこんで

いるようである。ここにある母は決して息子の進もうとする道を理解し励ましてくれる母ではない。Nセメント会社を蹴首された後、運よく新聞社の労働記者の職を得た息子に対し、「『今度こそは輕はずみは為ないでね。で無いと子供が不慮だからね』と、(中略) 眼に何とも言ひやうのない感じの籠った涙を溢らせて」(『誰が殺したか?』(昭5・1 日本評論社) 訴える母なのである。また、「海に生きる人々」執筆後の出来事であろうと思われるが、伊藤長光によれば「息子が異端者の道を歩き、続く迫害と困窮の生活に耐えかねて、年の瀬迫ったある日に、自分の舌を鉄で切って自殺を図」(『葉山君の追憶―夜明け前の人々』「街のパンフレット」第25号 昭28・11・1 浦西「年譜」)る母でもある。さらには、明治三十九年頃以来、長らく別れていたこの母が名古屋に来、十数年ぶりに同居することになって間もなくの未決収監なのである。このような母が、息子の思想的立場を理解できぬままに、なお獄中にある息子を思いやっているとすることを伝え聞くことは、葉山にとって何にも代え難い苦痛であったに違いない。森山重雄は「労働運動に従事する者は、当時の状況にあっては、個人の幸福を最初から放棄してかからなければならぬ。『誰が殺したか?』の真のモチーフは、この社会的献身と個人の幸福の背馳ということにあった」(『葉山嘉樹論』「序説―転換期の文学」昭49・1 三書房)と言っているが、この歌からも十分に「誰が殺したか?」に通う痛みを読みとることが出来るだろう。

「獄中記」は大正十二年、葉山が名古屋共産党事件(舎製共産党事件)によって検挙され、名古屋刑務所未決監に収監されていた折の記録である。次にその一部を抜粋する。(傍点は筆者、点線は中略を意味する)

◇7・4 面接、書信の禁止決定

◇7・9 昨夜よりしける。安眠出来ず。……一日淋しかりき。

◇7・11 マルクス一ノ二読了。体力衰弱、倦怠を覚ゆ。……難波

起草。

◇ 7・14 喜和子より五十銭差し入れあり。

◇ 7・16 面会、書信を求む。

◇ 7・17 面接許可願書提出。

◇ 7・20 資本論第一巻三冊読了、夕刻第三巻一冊に移ル。

◇ 7・23 難波第一篇脱稿、第二篇に移る。

◇ 7・31 七月も今日をもつて逝く。予審調一回きり。噫、思ふべし。 忍ぶ。 忍ぶ。 暑し。

◇ 8・7 〔喜和子面会〕 書信禁ぜられ居れば、既決と異なる処なし。……喜和子午后面会に来る。家庭のことなど聞けば、懐くもあり、うれしくも、また悲しきことも多かつた。兎に角飢ゑぬやう、丈夫であてくれることを祈るより外に仕方がない。

◇ 8・8 昨夜晩くまで、妻子のことを思ひ、且つ暑き蒸す如くに眠れず。何だかセンチメンタルになつた。思つても仕方はないにしても思はずにゐられないのが人情か、出てからすぐに出版せねばならぬ。……家族は全く可哀想だ。十日付ヲ以テ、書信接見ノ禁止解除せられた。

◇ 8・11 昨夜、海水浴に行きし由、危いと思ふ。きわ子が海水浴に行つたと云ふことは、予を非常に苦しめた。そのことは二重に自分を苦しめる。社会の人が彼女に対しての考へと、自分だけの考へと、とまれこれは俺を苦しめた。

◇ 8・20 きわや子のことか心配になる。土曜の面会で海水浴のことを云つたからだらう。あれだけ張りつめてゐた元気が一度にぬけたのだ。かはいさうに。許してくれ。俺のヒスなんだから。 夢現で考へるともなく種々な幻を描いてゐると獄中だと

◇ 9・3 云ふことを忘れる。 家の経済も愈々行き詰りて、喜和子も往生したらしい。

◇ 9・5 ああ、俺は、……一切のものを売り尽すやうに云ふ。 外の事を考へると淋しくて堪らぬ。きわ子もさぞ二人の子供を抱へて苦しんでゐるであらう。会へないと全く淋しい。寧ろ苦しい。

◇ 9・7 此四日、きわ子は名古屋から離れてゐるやうな気がする。若き燕がゐたのか、きわ子が来た。一日赤尾八穂に泊つたと云ふので嫉けた。が、今はそんな時ではない。食へさへすればいいのだ。命さへあればいいのだ。もう彼女が他の男と結婚してもいいから丈夫で子供を育ててくれ。俺はもう俺の運命に見切りをつけた。あ、人世は苦しいものだ。泣くに泣けない苦しさだ。

◇ 9・13 あ、東京には震災があつた。名古屋には人災がある。 ……僕たち一家は悲痛から免疫されてしまつた。 今度出たら、俺は純然たる政党屋になつてやるぞ。

◇ 9・16 きわ子が来た。いろ／＼事情を聞くと腸を断たれる思いがある。どうしても今月で家を明けねばならないだらう。原稿を買つてさへくれ、ば一ヶ月やそこら延びても構やしないんだけれど、暮しが困る。

◇ 9・25 家具衣類を売つたさうだ。あ、自亡自棄な気になりさうだ。 強い心、反抗心が此の残渣もなく消え去つて、今はもう弱い淋しい生入意気地のない泣虫の心だけが、暗く絶望的に胸の中に巣食つてしまつて、表面丈けの強がりも云へない。全く淋しい。人間は理論一点張りではいかぬ。感情が非常な力を持つてゐる。矢つ張り俺は作家だ。

◇ 9・28

実際家ではない。

長くなつたが、右の抜粋部分によつてもあの「淫売婦」を書いた頃に  
関する回想と同じ精神状態にある葉山の姿を、より具体的に、より鮮  
明にうかがい得るだろう。また、右に抜粋した部分は獄中における葉  
山の精神的動揺を伝える部分を中心となつてはいるが、故意に運動関  
係の記述を無視したのではなくて、葉山の記述そのものがこのような  
傾向を持つてゐることによつていふ言えるだろう。獄中であること  
の制約がこうした傾向をもたらしたと考えられなくもないが、「名古  
屋事件における被告たちの態度は、(裁判の調査を見る限りでは)筆者  
洗いや事実を明らかにして、これを法廷闘争にもちこもうとする  
風であつて、少しも事実を隠したりする態度はみられない。」(森山  
重雄「葉山喜樹と名古屋事件」『序説 転換期の文学』既出)ということであつて  
みれば、同じ名古屋新聞社の記者仲間亀田や運動の同志山崎  
らとの面会の口には、もう少し書かれていてもよいのではないかと思  
われるが、運動面にかかわる記述は少ないのである。このような点か  
ら考えても、葉山内面の傾斜の方向が自ら推察し得るはずである。

(三)

先に、小倉の形象は葉山の内面に燃るネガティブな側面とかかわる  
のではないかと言つたが、ここで、小倉について詳しく見ることにし  
よう。

小倉は葉山の万字丸船員時代の友人小椋甚一をモデルにして造型さ  
れていることは周知のとおりであり、小倉の形象は実在の小椋甚一に  
負うところが大きい。例えば小倉は万寿丸のコーター・マスターとし  
て登場するが、直話によると小椋甚一も万字丸のコーター・マスター  
(操舵手)であつた。そして、小倉の形象に必然性を持たせる上で非常

に重要な次のような部分も、実は実在の小椋甚一の体験に負うところ  
が大きいようである。つまり、小倉が「自分の位置を、高めることに  
よつて、酷使と隷屬と侮辱とから、逃れよう」と(二五)しているという  
人物設定にかかわる部分である。彼が知識としては階級的認識法を持  
ちながら、現実生活にあつては「自分の位置を、高める」という方向  
に行動せざるを得ないのは、彼が「若し、高等海員になつて稍多い収  
入を得ないならば、山陰道の山中で、冷酷な自然と、惨忍なる搾取と  
の迫害から、その僻村全體が寒さのために凍死し、飢餓のために餓死  
しなければならぬ」(二三)からだとしてゐる。さらに、小倉の村がこ  
のような困窮に陥つた理由については、「村の者は森林の産物をその  
生活資料としてゐた。所がそれ等の森林は國有林になつて終つた。  
そこで、その村の者は、監獄へ行くか、餓えるかと云ふ二つの道のど  
ちらかを取るやうに強ひられた」(二三)というように設定してゐる。小  
倉がこのような村の社会・村の歴史を引きずつてゐるというように描  
くことは、小倉の葛藤——現実生活と知識との断層・き裂——に必然  
性を持たせ、小倉の事大主義を讀者に納得させるのに有効性を持つて  
ゐる。ところで、階級社会を個人的な努力によつて上昇しようとする  
人物として設定された小倉の形象にとつて、最も重要なこうしたファ  
クターの殆んどが、既に触れておいたように実在の小椋甚一の体験を  
モデルにして構成されてゐるらしいのである。また、小倉は船長免  
状を取る資格を得るため「二度も沈没したりして、それに必要な履歴  
が実地として取つてあつた」(三三)とあるが、これも小椋の体験に則し  
てゐるらしい。しかし、だからと言つて「海に生きる人々」が、万  
字丸において葉山が体験した出来事をそのまま描いたものだなどと言  
つてゐるのではない。

「海に生きる人々」の小倉は万寿丸の闘争に立ちあがり、その闘争  
によつて下船命令を受けてゐる。これは明らかに葉山の構想である。

葉山の小椋宛書簡（葉山嘉樹未発表書簡―海員時代の友人・小椋甚一氏宛―）  
 『民主文学』昭45・10）に「どうやら、一等運転士位にはなつたらしい  
 ね」（大15・10・21消印）とある。さらには、万寿丸に見られるような  
 形での闘争そのものが、万字丸には無かつたのである（浦西「年譜」。  
 では、実在の小椋甚一から万寿丸の小倉を造形していった過程で、  
 葉山は小倉という形象の中に何を封じこめたのだろうか。

既に述べたように「『淫売婦』を書いた時の思ひ出」や「獄中記」  
 からうかがえる葉山は、労働運動の闘士たることから来る家庭破壊に  
 苦しんでおり、社会正義に私的世界のすべてを捧げて悔いしないとい  
 った、鉄の人間でないことは明らかである。葉山の子供に対する愛が  
 異常と言っても良い程に激しいものであることは、葉山の作品を読む  
 者のすべてが感じるところであろうし、肉親への愛が葉山の文学世界  
 を構成する重要なモチーフとなつてゐることも周知のとおりである。  
 「民雄だらう待合室で暑さのため泣き喚いた。腸を断たれる思いがし  
 た。こんなに熱いんだもの。湿手拭で、止め度もなく出る涙を押へて  
 ゐた。」（『獄中記』大12・8・9）、「嘉坊が握手をすると云つて手を  
 幾度も出すんだ。堪らないぢやないか。」（同8・9）、「出たらほん  
 とに、熱いキスを（喜和子に筆者）与へてやらう」（同8・8）、「し  
 っかり頼むぞ、きわ子、いとしいきわ子。愛するきわ子。一口快惱  
 す。」（同9・3）このような記述にも、獄中における葉山の肉親への  
 愛と、そのように愛する肉親と離れて暮らさねばならないことへの苦  
 しみが如実に表現されていると言えらう。

葉山は獄中であつて、愛するが故に一層、家族の暮らし振りについ  
 ても心をくだかねばならなかつた。先に抜粋した獄中記の八月七・八  
 日、九月三・十八・二十五日にもそれは記されており、七月十四日の  
 「喜和子より五十銭差し入れあり」（この時、ジャムパン一個25銭）、「獄  
 中記」同日の記述）は「獄中記」を読む者の心を刺すものでもある。葉

山の留守家族の暮らし振りについては「マドロスと鼠」（『文芸公論』  
 昭2・1）の大浦仁平（小椋）の手紙によつてもうかがえる。橋本（葉  
 山）の入獄を知らず久し振りの再会を楽しみにN港（名古屋港）へ寄港  
 した大浦に、妻君が橋本に代つて会いに行つた。その妻君を見て船員  
 たちが「貴下の處には避難民の婦人がお見えになりましたね」と言つ  
 たのである。このことでも明らかのように、家族達が困窮の  
 極にあつたことは十分に知れるだろう。獄外にあるこのような肉親の  
 生活を思いやる時、葉山はやり切れなかつたに違いない。「二三日会  
 ひに来られぬかも知れぬ。その間に今月中（の生活費）筆者」と、保釈  
 金の工面をする」（『獄中記』大12・9・3）と言つて帰つた喜和子ら  
 のことを考え、先に抜粋した九月五日の内容が記述されるのである。  
 このような葉山に「誰が殺したか？」の次の部分に見られるようなマ  
 イホーム主義への傾斜は有り得なかつただろうか。

父は、「かうして嘉和を愛しながら、平和な、平凡な、無事な家  
 庭生活を送つて行きたい。名前も要らない。ただ俺をこの幸福のま  
 ゝ、そうつとして置いて呉れ。子供を愛育すると云ふ事の上に、俺  
 の一生の目的を置かせて呉れ」

と、誰にともしに頼むやうな氣持で暮らしてゐた。（二）  
 しかし、獄中の葉山を苦しめるのは決してこれだけではなかつた。  
 愛する家族の中にかえ、彼を苦しめるものがあつた。それは妻に対す  
 る嫉妬心であり猜疑心であつた。だが、この猜疑心は決して根拠の無  
 いものではなく、その故に一層深刻であつたと思われる。「獄中記」  
 （大12・8・17、9・7）にもその片鱗はうかがえるが、この妻喜和子  
 との生活を扱つた「鼻を舐ふ男」（『新潮』昭2・8）でも次のように  
 描いている。

幾年も家を空けて、監獄に暮すと云ふ事は、決して自然な事では  
 なかつた。それは私にとつて忌々しい堪へ切れない、鬱陶しい期間

であった。きよ子にとつても同様に焦れつたい癪に障る事だつた。それに、私たちはプラトニックなラヴをした間柄ではないので、その間の微妙な問題も、娑婆に残つてゐるきよ子としては、大きな煩悶の一つに違ひなかつた。

(中略)

私たちの後を受けて活動したKと、きよ子とが、月のある晩、電燈を消して巫山戯てゐたと、母が私に言つた。

が、私はKときよ子とを信じて、母を信じなかつた。(C)

また、「歪みくねつた道」(『改造』昭7・2)においても、「波田が木曾に入る一ヶ月許り前、未決監から出て二三日後」の出来事——妻やず子が不貞の雰囲氣が感ぜられるような家出をした——が、「波田が、何故運動を止めて木曾へ入つたか、といふこと」の「一つのヒント」であるという形で描かれている。

「鼻を覗ふ男」にしても「誰が殺したか?」「歪みくねつた道」にしても、「海に生きる人々」が何らかの体験をもとに葉山によつてフィクションされたのと同様に、これらの作品もそれぞれに、葉山によつて構想されたものであることに変わりはない。しかし、葉山の文学活動の初期の作品で、名古屋における生活に材を得た一連の作品群(「出しゃうのない手紙」『文章往来』大15・2)「遺書」『作品集』淫売婦』大15・7 春陽堂)「迷へる親」『新潮』昭4・7)などがその顯著なものと考えられる)には、家庭の平和と社会運動との統一しがたい希求の相克に悩んだ原体験の生々しい余韻を伝えるものが多いことも事実である。

(四)

さて、獄中の葉山の内面について見て来たが、葉山はこのような労働運動の戦線からの後退を強いる要因を一方に持ちながら、またもう

一方では、獄中にあつて『資本論』『国民経済学講話』『唯物史観研究』等々をメモを取りながら読み進め、自己の階級的情熱に油を注ぎ続けてもいるのである。このような、簡単には統一し得ない二つの方向(それはどちらも葉山にとつて真実なるもののだが)へ裁断された葛藤を外化し客体化してゆく過程が、実は、実在の小椋甚一をモデルにして、小倉という形象を造形してゆく過程ともなつたのではないだろうか。

小倉は一見、階級意識に立つたかの観を呈して登場する。藤原との公話で「僕等は、僕等としての意識を持つ必要が生じて来るんだ」と言い、さらに続けて、

資本家や、資本家の傀儡共が、商品を生産するやうに、濫造した、出来合の御用思想だけが、思想だと思ふことを止めて、僕等や僕等の考へ方、行ひ方があることをハツキリ知らなきやならないんだ。(E)

と言つてもいい。小倉のこの意識は、言葉自体としては、「海に生きる人々」の闘争の破綻に際して叫ぶ「俺等のことならお世話にやらないや。道が異つてるんだからなあ。」(D)という波田の意識、さらには「私は多くの怒りと感謝とを、最初の未決で學んだ。私は感謝するか怒るか、その二つの感情以外には何にも持つてはならない事を學んだ」(二つの無限の行列は獨房の前から、監獄の庭を通り、門を出て、内地から海を越えて、世界の果まで續いてゐるのだつた。)(「誰が殺したか?」(三)に通じる意識でもある。つまり、支配階級の伝統が歴史的に築き続けた価値の体系とは別な、労働者自身の価値観や歴史認識を持たねばならないとするものである。このように見て来ると、小倉は既に意識に目覚めた存在なのである。しかし、藤原の「どうして、それを考へ、どうしてそれを知ればい、んだ」という問いに対しては「それは餘り困難な問題だ。僕はそれで悩んでるんだ」(F)と答

えざるを得ない。このことでもわかるように、小倉は概念として労働者の論理的基盤を知りながら、その内実については、未だ具体的に把握し得ていない存在である。つまり、ブルジョアの価値の体系を否定しなければならぬという意識に止まり、自らの価値の体系を未だ持ち得ていない、あるいは、否定しようとしながらブルジョアの価値の体系に規制されている人物なのである。このような小倉は、「サンパン止め」の深夜の横浜港内を船長の私的欲望のためにサンパンを漕がされながら、自己の内部に揺れ動く階級意識と事大主義的な意識とを見つめている。

人間は、命令を好むものだ。命令の下には總ての人間が死に得るが、自分からは一人の人間も、よく自分を殺し得ないものだ。(中略) 奴隷の歴史を讀んで、その主人の暴虐に憤る前に、人は、その奴隷の無智と、無活氣なるを慨かないだらうか。われら、賃銀労働者も、奴隷のやうに、農奴のやうに、われ等の子孫をして拳を握らしめないであらうか。それは、人間の力を以ては、意思の力を以てしては、いかんともなし難い処のものであるか。

俺が、人類の歴史を見て泣くやうに、俺は又泣かねばならぬ歴史を、書き足しつゝあるのだ。俺は、さう云ふ汚れた歴史に邪魔者として入ることは、今までできたのだ。又今でも出来るのだ。だが、それが能きない處に人類の歴史が汚されるやうな大きな結果が持ち上るのだ。だが、血と肉とで積み上げられた歴史は、その生贅が甚しかつただけ、それだけ美しい花が咲くんだ。歴史が行く道を俺はついて行き、その歴史の轡を押せばいいのだ。(六 傍点筆者)

ここに見られる小倉の内面の動きは、自ら死を決することの出来ない自分が「汚れた歴史の邪魔者として入ること」の代りに、「人類の歴史」の「生贅」の側に身を置くことの中に、消極的な歴史への参画を見ようとするものであり、知識としての階級意識と大勢順応的な事大

主義の意識とを、消極的ではあるにしても統一しようとするものなのである。

葉山は「海に生くる人々」執筆以前、大正十年の『名古屋新聞』(6・10)に「工場の窓より(一)」(清水茂「名古屋の労働運動と葉山嘉樹(その二)」)を載せているが、それは、「海に生くる人々」の藤原の回想の部分や「誰が殺したか？」(三)にも扱われている名古屋セメント会社工務係時代に体験した、村井庄吉の防塵室転落事件(大10・5・19 浦西「年譜」)とその事件の処理にかかわって餓首された自己についての感想と云えるような文章である。その文章で葉山は、

兄弟よ、十字架を負うて逝ける兄弟(村井庄吉を指しているものと思われる「筆者」と、その遺族のためにわれ等の味方になって奮闘した、一人の算盤玉(葉山自身を指す「筆者」)は、工務課から排斥せられ、主腦者によって首が、そのあるべき處以外に置かれやうとしてゐるのだ。

兄弟よ、われ等の肉と血潮の上に、脂切つた肉體と、それを包む華美な衣服と、莊大なる邸宅を載せて、悦樂を貪る資本家に反抗してはならぬ。われ等は絶対に無抵抗主義であらねばならぬ。若し反抗を試みるならば、首の周りに鐵の柵を結ぶ廻してからにするがいい。又は、われ等及其その家族の胃の腑と腸とを切開除去した後にするがいい。

兄弟よ、おとなしく暴風雨の過去をのを待たう。希望と憧憬とを以て、鷹て來る理想の暖かい光を待たう。(傍点筆者)

と述べて結んでいる。この結語に見られる葉山の意識と、先の小倉の歴史観(存在認識)との間には、キリスト教的終末観・あるいはパラダイス指向と言えそうな発想がことばとして記されているか否かという細部の違いはあるにしても、両者が共通して、歴史変化の法則に対する楽天性を感じさせることは興味深いことである。そして、この楽



天的な歴史観に立って、葉山は小倉の統一し難い葛藤を統一させてしまっているのである。<sup>102</sup>

先の小倉の意識と「工場の窓より」との間には二年の隔りがある。そしてこの二年の間に愛知時計電機争議の指導・検束・未決入監・服役等の経験をしたのであり、二つの意識を無条件に短絡させることは出来ないだろう。が、大正十三年十月の巢鴨刑務所服役を間近に控えた葉山の家庭を扱ったと思われる「別離」(『若草』 昭2・10)に

母や、女房や、子供などに大して愛着を持つてゐなければ、又、始末もいゝのだつたが、家庭の事となると、逆も涙もろい彼であつた。その點で、彼は、社會主義者になつた事を後悔してゐた。

社會主義者になりさへしなかつたら、かうも苦勞をしなくても濟んだであらうに、と絶えず、彼は思った。

と書き記していることは、入獄や社會運動と家庭とのかかわりについで葉山の感想として無視出来ないものと思われる。小倉の形象に戻って、小倉の形象については「知識はありながら、身にしみついた事大主義的根性のために体制順応に終始しがちな」「大正前期から後期」の労働運動界の一タイプとして造型された(木村幸雄「『海に生くる人々』をめぐって」『日本近代文学』16号 昭47・5)という見方もある。結果としての作品を歴史に位置づければこのようなことになって来ようが、その形象の造型過程を考えると、果して葉山が、小倉をこのように客観視し得たかどうか疑いが残るのである。既に見たとおり、小倉の事大主義は、彼が「一村の運命を担つて」(二七)いることに起因するが、小倉の転身への最後のためらいを、

「僕が今職業を失へば、僕の故郷では、どんなに嘆くか知れやしないよ。それだけではないんだ。僕の家では食ふ物に困つてしまふんだ」小倉は感情が昂ぶつて来た。彼の頭には、彼が村を去る時の悲痛な光景が涙に曇つて浮んで來るのであつた。(三三)

と描く時、この小倉の内面に映ずる故郷の村の姿には、葉山が「娑婆」に残して來た家族の姿が重ねられていたに違いない。したがって、葉山が藤原の理論によって小倉を否定したことは、小倉の形象を通じて客体化した自己内部の迷いを否定することであり、それは社會運動のために家族的幸福を捨てるという自己に向けての決意表明でもあつたと言えるだろう。<sup>103</sup>しかし、「獄中記」(大12・9・28)に「全く淋しい。人間は理論一点張りではいかぬ。感情が非常な力を持つてゐる。矢つ張り俺は作家だ。實際家ではない。」とも記している。獄中にあつてメモを取りながら読書し思索した、その結果の理論的到達点が藤原の口にする理論として語られているのであろう。かつて文体的に藤原を分析した折にも、藤原を描く文体に限って葉山のダイナミズムが見られないことを指摘したが、藤原に関する文体がそうした様相を呈していたのは、藤原の形象の造型過程がこのようなものであつたことに起因していたからなのだろう。とは言え、藤原の形象が葉山を全く離れたところに形造られたと言うのではない。体験の集積から搾り出された素朴な正義感や、宗教的発想からの存在認識に端を発する階級観（104）といった立場でもって、さらに在るべき姿を理論的に整序して行つた結果が藤原であるという意味で、葉山の内面とかかわつてはいるのである。しかし、「海に生くる人々」によって、自己内部の葛藤に一応の決定を下したにもかかわらず、先の「獄中記」(大12・9・28)の記述にもあつた如く、また名古屋刑務所出獄後(大12・10・上旬)、家族とともに大同電力工事現場の張付けとして木曾の須原に住み込んでしまった、(同年十二月下旬)というようない連の葉山の言動を見ていると、藤原・小倉が共に葉山の内面にかわりつつ造型された形象でありながら、小倉の形象がいかに深く葉山の内面とかかわつていたかを知ることが出来るだろう。

小稿では主として小倉の形象に関連する問題点に限定して、「海に生くる人々」の成立にかかわる背景を考察してみた。「海に生くる人々」の思想方面に関しては、葉山の思想形成過程との関連において考察する予定なので、ここでは触れなかった。

## 注

- 1、「『海に生くる人々』の改題・改稿・発表経過等について」（関西大学『国文学』47号 昭47・9）、「葉山嘉樹年譜」（『葉山嘉樹』昭48・6 桜楓社）
  - 2、「（前略）職工ノアル者ガ其ノ様ナ共済組合ヲ作ルヨリハ大キナ友愛会ニ加入シタ方ガ宜イト申シタノデ私モ夫レガ宜カロウト思ヒ其ノ紹介ノ勞ヲ執ルコトニナツタノデアリマシタ（後略）」と陳述している。鶴田知也の談話「葉山嘉樹のこと」（『プロレタリア文学研究』昭41・10 芳賀書店）によれば、鶴田は中学時代（大9 豊津中学校卒業）に未だ戸畑に居た葉山から、戸畑での文芸講演会で「白樺批判をやれ」と言われたとのこと。葉山は「トルストイに凝っていたといっても白樺には反対で」「白樺に対抗してやらなきゃいかんと大分激励したらしい。しかし、「工場の窓より」（『名古屋新聞』大10・6・13）には「われ等は『人類の理想』へ向つて進み得るのである（傍点筆者）」と見えることから想像すると、白樺派のものを批判しながらも影響は受けていたと言えそうである。また、この頃は大正デモクラシーの全盛期であり、吉野作造の民本主義や阿部次郎らの人格主義・教養主義といったものからの感化もあったと思われる。さらに鶴田は同じ談話の中で、鶴田の実父高橋扉太郎から葉山がトルストイのキリスト教を学んでいたらしいことを伝えており、葉山の思想的立場は複雑に構成されていたようだ。先の「労働者としての立場」には、次のような部分が見られる。
- ◎ われ等は迷へる人類の運命を背負つた父ではないか。高き理想、
- 光ある神の國を常に見て、如何なる道が眞に神の國への道であるかを尋らぬやうにしなければならぬ。
- ◎ 世は恐るべき死の結果を招來するのである。破壊的革命、何物をも建設せざる絶望なる最後の日が来るのである。
- ◎ 人権蹂躪が神の國へ到るの道でなくて、温健なる拳闘運動が、それのみが人道である所以を示すべきである。
- 4、葉山の入獄歴は愛知時計電機争議による未決収監（大10・10・5〜同11・中旬）、同既決服役（大11・5〜同7）、名古屋共産党事件による未決収監（大12・6・28〜同11・下旬）、同既決服役（大13・10〜大14・3 以上浦西「年譜」）といったところである。「淫売婦」を書いた時の思ひ出」は、大正十二年の未決に關するものであり三度目の入獄についての思ひ出ということになる。「この四年、毎年一度監獄に」とあるのは、葉山の間違いなのか、この文章を書く段階での記憶の錯誤なのか。
  - 5、小椋基一氏の直話や私信によると、氏は鳥取・岡山県境の人形峠近くの村の出身で、木地師の伝統を持つ旧家であるらしい。この村は、当時炭焼きと牧畜（牛）に生計を頼っており、このような生業のゆえに山林に対する経済的な依存度は実に大きかった。ところが、明治三十年代前半頃、岡山県側の菅林所から山林官がやって來、木を伐採することを禁ずる杭を勝手に打って帰つたらしい。小椋氏は私信に当時の村と国有林について以下のように伝えていいる。
- 山林国有化について村民の經濟に及ぼす影響、それは極めて大きいものです。と申しますのは貧農は私有林がなく、一年分の薪炭は村の共有林を伐採して得たものです。また私有林がいくらあっても牛馬の飼料たる草を刈るのは共有の山です。（村は牛の産地です）現金収入を得る途は炭焼業のほかにありません。それができなくなつた。（中略）この杭打ちの際私の伯父が神経病を起し今でいうノイローゼというのでしょうか―寝込んでしまったという話は有名な語り草として残っている程です。

葉山が小倉の出自について描いた程ではないにしても、山林国有化が村人の経済生活に与えた影響は決して小さくなかったわけである。

この山林国有化について簡単に触れると明治六年の地租改正法に端を発し、地租増収のため私有制確立の必要にせまられた政府は、江戸期以来のアジア的な入会慣行地をも私的所有権の明確化という形で機械的に処理してしまおうとした。しかし政府のこの方針が徹底するのは明治三十二年の国有林野法（3・23）国有土地森林原野下戻法（4・18）の公布以後である。中村吉治「村落構造の史的分析」（昭41・6 日本評論社）には岩手県・煙山村についての克明な調査が報告されている。岩手と山陰地方では若干事情も異なるだろうが、中村は林野庁の次のような報告を引いているが興味深い内容である。「當時部落の共謀による盗伐が頻発している。當時當番のようにして部落の若い者が犠牲者となって入牢し、そのあとの生活を部落全體で引受けたというのである」

6、

「海に生きる人々」にも「村の者は森林の産物をその生活資料としてゐた。所がそれ等の森林は国有林になつて終つた。そこで、その村の者は、監獄へ行くか、餓えるかと云ふ二つの道のどちらかを取るやうに強ひられた。」とあり、よく似た事情があつたのかも知れない。小椋氏の直話によると、当時商船学校卒業者には外洋航路の船長資格たる甲種免許が与えられていた。ところが小椋氏のような実地から叩きあげられた者は汽船甲種免許しか取れず、商船学校卒業者との間に区別が設けてあつたらしい。そして、小椋氏のようなコースから甲種免許を取得するには一年間の横帆装置（帆ゲタ）が横に走っているもののある船への乗船歴を要したらしい。これが「それに必要な履歴」である。小椋氏はそこで順宝丸という外洋帆船に乗り組み、マール群島など南洋航路に出かけた。ところが帰ってみると日本郵船がこの航路を汽船の航路として開くことに決つていて、小椋氏らの帆船はお払い箱となり、山口県の買主のもとへ移送することとなつた。小椋氏がこの移送に乗り組んだのは、甲種免許を取るために必要な乗

船歴が一年に若干足りなかつたからであつた。ところがこの航海で小椋氏は二度目の沈没を経験した。大正四年、紀淡海峡で春洋丸と衝突し、（順宝丸は帆船で木造だったので）真二つになつたらしい。この船が真二つになつてしまつたことについては、波田の沈没経験に「一度は胴つ腹を乗り切られ」(2)と生かしている。

7、

他の書簡（大15・12・8付）でも、  
気の小さい小椋君、正直もの、小椋君。僕は又、君が一セーラーとしての葉山でなしに、社会主義作家としての葉山と、交際するのを遠慮し、危惧してゐるのではないかと思つた。そうする事に理由が無い事もないからね。

と記している。

8、

小椋氏宛書簡（昭2・1・26付）に「君に貰つた手紙と、新聞とを切り抜いて、正月の文芸公論で発表したが」と言つており、「マドロスと鼠」の成立経緯がわかる。小椋氏の直話の中でも「避難民の婦人」云々という形容を聞いた。また、次男民雄をつれ嘉和子が名古屋港寄港中の小椋氏を訪れたのは大正十二年九月十四・五日頃のことらしい。

9、

浦西「年譜」には次のようにある。  
喜和子と金子兼太との恋愛は、葉山嘉樹が未決で服役中の出来事であつて、それは大正十二年のことである。

10、

『資本論』は高崑素之訳で大正九年六月大鑑閣から出版された。『国民経済学講話』は「葉山嘉樹日記」後注にもあるように、この頃の書物には同名のものは見当たらない（神戸高等商業学校商業研究所編『経済文献目録』昭2・10 宝文館）。「葉山嘉樹日記」後注には「福田徳三著『国民経済講話』のことか。」として二種類の版（大正六年の佐藤出版部版・大正十年の大鑑閣版）が紹介されているが、かなり広く読まれていたらしい。福田徳三のものとしては他に『日本経済史論』（大3 宝文館）を読んでいる。「唯物史観研究」は「日記」後注によると大正十二年の木蘇毅訳の而立社版が紹介されているが、先の『経済文献目録』によると、他に河上肇著（大10 弘文堂）

- 11、の同名の書物もあったようだ。  
引用文中傍点を付した二つの部分には葉山の混乱が感じられる。初めの「汚れた歴史」がプロレタリアの視点からの歴史観であるのに比して、後の「歴史が汚される」という言い方はプロレタリア革命を肯定するところに立っていないと言えよう。葉山は「労働者としての立場」(注③)の中で「温健なる労働運動が、そのみが人道である所以を示すべきである。」と言っているが、大正十年頃の葉山には宗教的な無抵抗主義・人格主義・教養主義の傾向が強く、先の傍点部分に感じられる混乱はこの頃の価値観・歴史観の揺曳を、藤原的な理論によって断ち切ろうとしたところに生じた混乱と思われる。
- 12、「工場の窓より」の引用文中の「十字架を負うて逝ける兄弟」という表現について。労働災害にたおれた者を「十字架を負うて逝ける」と表現する葉山の意識には、明らかに労働神聖観から発した殉教意識が感じられる。これを敷衍して葉山の歴史観・社会観にかかわらせると「淫売婦」の「殉教者を見た」ということばや「セメント樽の中の手紙」(『文芸戦線』大15・1)において、破砕器に転落した女工の恋人を描く葉山の問題意識(「海に生くる人々」の十七章にも描かれている)に通じていると言えようし、さらに、先のサンパン上における小倉の歴史認識「その生贅が甚しかっただけ、それだけ美しい花が咲くんだ。」に通じていると言えよう。
- 13、「海に生くる人々」で小倉を、階級意識と事大主義的意識とを持つ形象として最初から登場させ(徐々に覚醒するのではなく)、二者択一を迫る方向に問詰めているが、これは小倉に形象化された葉山内面の葛藤を問詰めることでもあった。
- 14、「葉山嘉樹小論―『海に生くる人々』に現われた葉山の内面的論理について―」(『論究日本文学』昭43・11)
- 15、「宗教的発想からの存在認識による階級観」と言ったが、注③で鶴田知也の談話を引いて戸畑時代以後の葉山に触れたが、葉山は清水茂編「名古屋の労働運動と葉山嘉樹(その一)」によると「大乘仏教の宗

教思想研究団体らしい『極楽社』」なるものに関係していたことである。「名古屋通俗図書館報」(第136号 大10・7・25)の「新刊紹介」欄に

極楽世界創刊誌本誌は宗教改革同盟機関にて主意書、大佛教の大使命、社会改造の根本原理、地獄極楽対照表等紙上滿載一冊三十錢 東区富澤町二の一極楽會愛知本部(傍点原文)

とあるところから見ると、一種の実践団体でもあったことが想像される。しかし「小林橋川氏に」(『新愛知』大10・5・25 26 如実編「名古屋の労働運動と葉山嘉樹(その二)」)「プロレタリア文学研究」を見ると、「私たち『極楽世界』の同人は、決して他の人が『釈迦』や『クリスト』でないと言ふ理由で非難はしない」とか、「釈尊の偉大なる思想、クリストの偉大なる愛が」といった形で等価的に並記されている点から考えると、単に葉山の思想なのかも知れないが、大正デモクラシーの潮流下の人格主義的傾向から派生した、修養主義的な宗教団体ではなかったかとも思われる。

なお、東区富澤町二の一(現在中区錦三丁目十一番地)には当時から浄土真宗大谷派の聖徳寺があった。住職小笠原長晴氏の私信によると、聖徳寺とは無関係で、当時聖徳寺には貸家があり、その借家人かも知れないとのことである。

なお、葉山嘉樹と『極楽世界』の関係については別稿を予定している。

---

## A traial about "Umi ni ikuru hitobito"

Takashi Asada

### **Summary**

This work is conceived to be written in Nagoya Prison. So, they make reserch in Yoshiki's possitive side in this work. But we must make more research in his negative side. Because we find his loneliness and agony to his family rather than his passion when we read his "Gokuchuki".